

巻 頭 言

病 院 長

近 藤 哲 夫

平成9年6月に当院の移転新築が行われ、今年で10年が経過した。7月にささやかな10周年の記念行事を開催させていただいた。

10年前には最新で機能も充実していた施設、医療機器も年月と医療水準の変化に伴い各所に不具合が生じてきており、見直しの必要にせまられている。このような悩みは年月の経過とともに当然起こってくる止むを得ないことかと思うが、それ以上に我が国の医療環境の大きな変化に苦悩しているのは当院だけではないと思う。私はこの数年間、「医療をとりまく環境はますます厳しくなっている」という言葉を何度話したり、書いたりしたであろうか。しかしこの一年間、先ず口にする言葉は「医療の危機、崩壊」に変わってきた。国の医療費抑制政策、卒後臨床研修医制度に端を発した勤務医の極端な不足・偏在、7対1看護体制による地方病院の看護師不足など枚挙に暇がないほどである。地域医療に携わるものとしての不満や不安が常に渦巻いているのも現状である。

平成18年のある病院運営実態報告によると、自治体病院の9割が赤字であるという。一向に経営が良くなる。何故だろう？ 我々の病院が経営に無頓着なためであろうか？ そんなことは断じてない。これは我々の経営努力以上に我が国の厳しい医療費抑制政策に原因があると言うのは乱暴だろうか。国の財政危機を医療費の削減で解消しようとしているとしか思えない。この施策はいずれ国民（患者）の不幸につながるのではないかと危惧している。

「医療崩壊」の著者である虎の門病院医師の小松秀樹氏は、このなかで我が国の医療機関が、医療費抑制と医療の安全性の要求というお互い矛盾することを余儀なくされていることが労働環境を悪化し、医療の後退につながっていると書いている。私もその通りだと思う。

近年、医療安全が強く言われ、このことが多くの業務内容をますます複雑にしており人的、経済的、時間的、個々人の精神的な負担が大きくなっていることも事実である。

翻って目を内に転じてみよう。当院も医師・看護師を中心とした職員の労働環境は厳しい状況にある。特に医師においては外来・病棟診療、手術、検査、患者・家族へのインフォームドコンセント、救急患者対応、当直業務、時間外診療要請、大量の書類書き、院内外の各種会議への出席、学会活動、講演などなど……。プライベートの時間はとても充分にとれるとは思えない。医師・看護師の使命のひとつには献身的な医療を行うことが少なからず含まれていると思うが、これにも限度がある。体力がもたない。幸い市長をはじめ、市の理事者ならびに市議会のご理解をいただき本年8月から土曜日外来は全面休診とすることになった。今後も職場が職員特に医師・看護師にとってやりがいのある、そして仕事のしやすい環境づくりに努力して行かなければならないと考えている。

一方、当院は地域センター病院でありその使命を考えると、診療規模の縮小は相当の理由がないかぎり回避しなければならない。勤務医不足のなかでセンター病院の機能を維持していくことにもかなり厳しい面があり苦勞しているのが実情である。人員不足の中で、市立病院かつ地域センター病院としての任務を果たして行くためには地域の医療機関とのより一層の連携、機能分担も視野に入れて行かなければならないと思う。

このように厳しい病院運営と過酷な勤務状況の中で、第32巻市立室蘭総合病院医誌が発刊されたことはこの上ない喜びである。勤務時間の合間を縫い、また深夜に及んで原稿を執筆された職員諸氏と院内編集委員会の委員一人ひとりの努力に感謝を申し上げたい。当院の医学、医療レベルの堅持・向上に向けての職員のなみなみならぬ気概を感じる。また本誌が当院での日常の診療業務に役立ち、その結果多くの面で患者へ貢献できることを願っている。

（平成19年12月）